

第 1 回 兵庫県自転車活用推進計画策定協議会 議事要旨

1. 日 時 令和元年 6 月 4 日 (火) 15 時 00 分～17 時 15 分
2. 場 所 ひょうご女性交流館 501 会議室
3. 出席者 楠田委員、黒河内委員、関委員、梶尾委員、藤本委員、古田委員、山中会長、吉田委員

4. 議事

- ・兵庫県自転車活用推進計画策定について (背景、目的、進め方)
- ・兵庫県の地域特性、兵庫県の自転車に関する現状
- ・計画の目標 (案)

5. 委員からの主な意見

<資料 2 : 兵庫県自転車活用推進計画策定について (背景、目的、進め方) 事務局より説明>

- ・なぜ今自転車が重要であるかを皆で共有する必要がある。
- ・これまでは安全教育がメインで考えられてきたが、これからは課題を解決するために自転車を活用していくという内容を計画に入れ込んでいく必要がある。
- ・免許のいらない移動手段は、自転車ぐらいしかない。
- ・観光だけじゃなくて生活交通に自転車を活用するのも重要である。
- ・車中心から人中心の道路づくりが求められている。
- ・人、移動手段、インフラの三位一体で考える必要がある。

<資料 3 : 兵庫県の地域特性、兵庫県の自転車に関する現状 事務局より説明>

- ・もう少し問題を明確にする必要がある。例えば、交通分担率が自動車に偏っている状況を踏まえ環境にやさしい自転車の利用を促進する、観光客の移動手段はどうなっているのか、免許返納者が増加し移動に困っていないか、自転車を利用するための体づくりの必要性、自転車通勤への手当など、社会的な背景を踏まえた分析が必要である。
- ・明石の自転車競技場は、競輪の選手会が先に予約しており、誰も練習していないのに利用出来ない状況がある。これは是非なんとかしてほしい。
- ・ハード・基盤・安全・観光に分かれているが、これらは全てつながっている。
- ・多様な部局が一緒になってこの計画をつくるにあたり、県庁の組織の仕組みにプロデュース機能という部分を取り入れていかないと本当の意味で進んでいかないと思う。
- ・兵庫県が目指す 2025 年ぐらいの姿を皆さんで共有できるように作っていく必要がある。
- ・自転車に乗る楽しさ、自転車を利用するための体づくり等、自転車に関する教育を推進していくべきである。
- ・サイクルツーリズムは、コンテンツとしての利用と、二次アクセスとしての利用が重要で、それぞれの視点で課題を抽出していくことが大切である。
- ・行政と協働して取り組んだサイクルガイドの実証実験で課題が認識されており、それらを兵庫県の自転車施策の課題に組み込む必要がある。
- ・自転車の安全に関する啓発や教育など、各部署が各年代に対して何をしているのかを見える化した表を作ってほしい。次回は、それを踏まえて議論したい。
- ・自転車活用推進計画と少し離れるが、今一番の課題である人口減少に対して、交流人口と定住人口を増やすことで都市経営を改善し持続可能な形をつくっていくという高い視点も考える必要がある。

<資料 4 : 計画の目標 (案) 事務局より説明>

- ・小中学生は、ほとんどの人が自転車を持っているが、スポーツバイクは、日本の自転車販売台数の中で 7～8% しかない。自転車を一時期で終わるブームではなく、兵庫県の文化として植え付けられるような施策をやっていききたい。
- ・兵庫県は関西の中で唯一、公道を使った国際レースや全日本選手権などが無い。例えば

公道を規制して神戸マラソンを実施できるのは文化があるからである。自転車の文化を是非この機会につくっていただきたい。

- ・川西市では、道路政策課、交通安全協会、警察署とのチームで幼児から高校まで一貫した自転車教育をしている。
- ・自転車に乗ることが格好良い・素敵であるといったプロモーションで自転車競技などを皆さんで楽しみ、イケてる地域・ここに住もうというプロモーションも考えられる。
- ・サイクルツーリズムの観点からは、自転車関連施設だけではなく、宿泊施設、道の駅のような観光に結びつく様々な場所を対象とする必要がある。
- ・外国人観光客の取り込みという課題に対しては、棚田の美しさなどのその場所でしか見られない景色を含むサイクルルートが必要である。また、宿泊施設にサイクルラックを置く補助をするだけでも外国人サイクリストの宿泊につながる。そのような施策が全国で増えている中で、兵庫県はいち早く進めてはどうか。
- ・観光振興という言葉は大きな言葉で、もう少しここを各論的に見ていく必要がある。地域の持続可能な経済の仕組みが地域の方達の小さな喜びにもなり、それが交流を深めていこう、関わっていこうという事にもなり、まさにスローツーリズムの一環でもある。自転車を利用して人と人が触れ合うことで地域の方との出会いを起し、そこに経済の仕組みが生まれるかもしれない。それが受け入れ環境の整備にもなる。もう少し視点を広げた分かりやすいキーワードを出していくべきである。
- ・特徴がある、他と違うといったブランド力がとても重要である。イベントは手段・手法のひとつである。観光を進めていくには地域の協力が大切で、オーバーツーリズムと言われるように、自転車がいっぱい走って嫌だなという状況にならないように、住民のホスピタリティを高めていくことも課題である。
- ・この計画では、新しい概念を出していった方が良い。既存の決まった計画から自転車が書いている部分だけを抜き出して集めたような計画では何も新しいところが出てこない。既存施策の整理からでは、出てこないアイデアもある。今何が問題になっているのかが不明確である。もう少しその幅を広げないといけない。どうしても既存路線の中で論じられてしまう所があるので注意が必要である。
- ・自転車先進国デンマークのコペンハーゲンでは、早くて格好良くて、乗っていると気持ち良いといった指標をつかって、車より自転車が良くと誘導するように自転車道を整備している。人口減少の中で、これまでと違った道のづくり方が必要である。「道まちづくり」という言葉もあり、生活をデザインするといった新たな格好良い街・道のづくり方、道の仕事を作ってみてはどうか。
- ・県として広域的な視点で何をすべきか、県ならではの方針が示せる計画を策定したい。
- ・計画年度が2023年度とあるが、全てやりきるという意味での年度ではなく、その間でしっかり何をするか考えるという期間でもある。何をすべきか分からない項目は、2年間で方針を考え、新しい取り組みが生まれるような仕掛けを計画の中に入れていただきたい。しっかり決めていくものだけでなく、新しいものを出そうといったことを計画に入れていただきたい。
- ・本計画を策定するための体制づくりが重要である。県の体制、市町村との連携、部局間の体制など、人の繋がりをしっかり考えていただきたい。アメリカでは「どこと協力します」としか書いていない計画もあり、そのような記載もありだと思う。
- ・死亡事故が起きるスポーツであるという認識は持つ必要がある。色々整備したが、死亡事故が起きたから自転車はだめだ、ということではない。認識を持っていてやるのと、持たずにやるのは全然違う。
- ・登山に比べて、自転車はそういう意識が遅れているという話は聞く。登山はもっと危険な状態もあるが、文化として根付いている。

以上